

皆様、おはようございます。

昨日朝に積雪がありましたが、クリスマスのころとの寒波とは比べるほどではない雪で、ほっといたしました。

明日は成人式です。昨年の4月から、成人の年齢が引き下げられ、18歳から成人となりました。かつての20歳と今の20歳を比較しても今の20歳の方が若い感じがしますのに、どうしてかと思えますと、いくつか理由があったようです。大人の自覚を早いうちから促し、選挙等への積極的社会参加を期待すること、犯罪の低年齢化により、18歳から大人と同じ責任能力を認めることによって厳罰に処せられにくい、責任意識の低い少年犯罪を思いとどまらせること、そして結婚できる年齢を男性が18歳、女性が16歳というのが性差別的だという意見に対して、共に18歳成人をもつて可能にするとした点が挙げられるようです。

いずれにせよ、18歳は判断力、理解力が大人と等しいとされ、様々な契約を18歳から大人として結ぶことが出来るようになりました。

ユダヤ人の文化の中ではどうかと言いますと、男性が13歳、女性が12歳が成人の年齢だそうです。日本でも平安時代以降、元服と言いまして、12歳ころから15,6歳で成人としていたようです。縄文時代 15歳 弥生時代 18歳から 28歳 古墳時代 25歳未満 飛鳥・奈良時代 20歳未満 平安時代 30歳から 40歳 鎌倉時代 24歳 室町時代 16歳 安土桃山時代 34,35歳 江戸時代 31.7歳 明治時代 44歳(明治 24~31年の平均) 大正時代 43歳(大正 10~14年の平均) 昭和時代 ※31歳 平成時代 83歳 ※昭和時代は、戦時中、31歳まで下がったといわれています。戦後、平均寿命は延び、昭和 22年に 50代、昭和 46年に 70代を超えるようになりました。そういうかつての平均寿命の短さを思えば、相対的に低年齢でも大人と見られるのが早くなるということが出来ます。

41 さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた。

42 イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のために上京した。

「少年イエス」は慣例に従って上京したとあります。ヨセフとマリアはイエス様と共に毎年過越の祭りのためにエルサレムの都上りをしていましたが、成人を翌年に控えるこの12歳という年齢において、翌年13歳になり、律法を守る成人と数えられるにあたり、前年にその予習をさせるのが父の義務であったという慣例を指します。

43 ところが、祭が終わって帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。

44 そして道連れの中にいることと思いきんで、一日路を行ってしまい、それから、親族や知人の中を捜しはじめたが、

45 見つからないので、捜しまわりながらエルサレムへ引返した。

過越の祭りも終わり、帰り道という時。この巡礼者たちは、群れをなし、初めに子供、次に女性、そして男性の順で歩み、子供たちは行列の前後を自由に駆け巡っていました。ですから、一日の旅路を進み、それぞれの順番がほどかれて家族が一つになる時に始めていないことに気づくということがあり得るわけです。そこでマリアとヨセフが、親族や知人の中にわが子が紛れていないかと探すのもよく分かります。道々どこかの人と一緒になり、そのままそこにいて、合流が遅れているのではないかと思ったわけです。しかし、見つからないので、朝から夕方まで来た道を実に三日もかかって細かい道へはぐれたのではないかと目を皿のようにして探しながら、ついにスタート地点のエルサレムの神殿まで戻ってきてしまいました。

43 ところが、祭が終わって帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。

未成年であるイエス様が、両親の教えと導きのうちに従って帰路に就くのは当然のことでした。ところが祭が終わって帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられました。そしてそうしようとしていることを、両親に告げていませんでした。

46 そして三日の後に、イエスが宮の中で教師たちの真ん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。

47 聞く人々はみな、イエスの賢さやその答に驚嘆していた。

48 両親はこれを見て驚き、そして母が彼に言った、「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」。

両親が見た光景は目を疑うものでした。自分の未成年の子供が、宮の中で教師たちの真ん中に座って、彼らの話を聞いたり質問したりしているのを見ました。これはいわゆる教理問答法であり、ユダヤの教授法・学問のやり方でした。

子供である年齢のわが子が当世一流の学者たちの真ん中で、問答をし、聞く人は皆その賢さや理解力、洞察力と知性に大変に驚愕していたというのです。このあと20年後、この中の或いは誰かが、公生涯に入られたイエス様とまた宮で再会することになったのでしょうか。今は深く驚愕しつつも知恵の深い子供だと思っただけだったのでしょうが、20年後のその時には、自分たちの立場を脅かす敵だと思ってしまったのです。少年イエス様は、「ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛され」、本当に知恵深く、教師たちが驚嘆する所のない知恵と知識を持つに至りました。しかしそれはイエス様が神の子、神ご自身だから成り立つことだと思いはなられませんか。神様であれば、たとえ12歳でも、6歳でも、よどみなく真理の言葉が口から出て当然だと。しかしイエス様は完

全な神様であると同時に、完全に人としての生涯を送られました。人の模範としての道を進まれました。

1 ペテロ 2:19 もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を耐え忍ぶなら、それはよみせられることである。

2:20 悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。

2:21 あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようと、模範を残されたのである。

2:22 キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。

2:23 ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。

2:24 さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。

2:25 あなたがたは、羊のようにさ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ったのである。

イエス様が模範として来られたのならば、私たちがその後について行けないような歩みをなさるはずがありません。イエス様は、私たちがその後を追っていけるような足跡を私たちに残して下さったのです。

しかし一番びっくりしたのははぐれたわが子がそのように堂々と振る舞っていたことなのですが、それよりなによりもまず無事であったことに安堵するとともに、それが出来るかどうか、立派かどうかは別として、どうしてそのような行動に出て、両親をへとへとになるまで苦しませ、心配を掛けさせたのかということをお聞きくださいました。

48 両親はこれを見て驚き、そして母が彼に言った、「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」。

49 するとイエスは言われた、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」。

深い痛みをもって、苦悩し、心を痛ませ、心配し、悩み3日間も過ごしたのですよ。なぜこんなことをしてくれたのですか。駄目じゃないかと頭ごなしに叱ることも出来たのかも知れませんが、不思議な出性によって生まれたわが子だけに、いったいどうしてという思いも突き止めたいと思ったのかもしれませんが、ここでは反省を促す意味で、どうしてこんなわ

がままをしてくれたのですか、理由はないでしょう、困らせたことを謝りなさいという意味で考えるのが自然なのではないでしょうか。

これに対してイエス様も、同じように「なぜ」という言葉で返されます。

49 するとイエスは言われた、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」。

50 しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかった。

51 それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった。母はこれらの事をみな心に留めていた。

皮肉なことに、少年イエスの両親は、成人でありながら、両親でありながら、未成年の少年イエスの言うことを理解できませんでした。

51 節の言葉は実に味わい深いです。イエス様は両親と一緒にナザレに行き、彼らにお仕えになれるより外の生き方があった(わたしが自分の父の家にいるはずのこと)のに、あえて彼らの子どもとしての生き方に従われたのです。

子供は神様からの預かり者という言葉がありますが、本当にそんなことを感じますし、イエス様にある神様のご計画とお知恵の奥深さにいよいよ引き付けられる思いがいたします。イエス様の両親になるという数奇な導き。しかしそこに、神様の深いご計画を感じて、そっと大事に心にしまい、反芻するマリアの姿が記されています。

私たちにとっても理解不能なことがあります。それは年齢によらない、経験によらない、いくら年を経ても、学者になろうとも、子供に愛情を注ぐ両親であつてもあずかり知らない不思議なことがあります。私たちの知恵は限られています。そうであれば、その理解不能であることを、心の中深くに、ちょうど土が種を発芽の時までじっと抱え込むように、じっとその出来事を心に宿し、意味を考える時に、時が至って理解できる日が来るのかもしれませんが。私たちは焦って理解しようとしないう方がいいのかもしれませんが。

52 イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。

ますます知恵が加わり、身丈も伸び、神と人ともに愛されたイエス様。私たちも、知恵深い大人としてではなくて、いつもいつも知恵を求め続ける、発展途上の子どもとしてわが身を顧み、神様の知恵を蓄える謙虚な低き心を持ち続けたいと願います。

マタイ 18:1 そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「いったい、天国ではだれ

がいちばん偉いのですか」。

18:2 すると、イエスは幼な子と呼ばせ、彼らのまん中に立たせて言われた、

18:3 「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。

18:4 この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。

18:5 また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。

マタイ 18:1 そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」。

18:2 すると、イエスは幼な子と呼ばせ、彼らのまん中に立たせて言われた、

18:3 「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。

18:4 この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。

18:5 また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。

マルコ 9:33 それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられるとき、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。

9:34 彼らは黙っていた。それは途中で、だれが一ばん偉いかと、互に論じ合っていたからである。

9:35 そこで、イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた、「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない」。

9:36 そして、ひとりの幼な子を取りあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われた。

9:37 「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを受けいれるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである」。

マルコ 10:13 イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。

10:14 それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。

10:15 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。

10:16 そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。

ルカ 9:46 弟子たちの間に、彼らのうちでだれがいちばん偉いだろうかということで、議論がはじまった。

9:47 イエスは彼らの心の思いを見抜き、ひとりの幼な子を取りあげて自分のそばに立たせ、彼らに言われた、

9:48 「だれでもこの幼な子をわたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。そしてわたしを受け入れる者は、わたしをおつかわしになったかたを受け入れるのである。あなたがたみんなの中でいちばん小さい者こそ、大きいのである」。

ルカ 18:15 イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちはそれを見て、彼らをたしなめた。

18:16 するとイエスは幼な子らを呼び寄せて言われた、「幼な子らをわたしのところに来るままにしておきなさい、止めてはならない。神の国はこのような者の国である。

18:17 よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受け入れる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。

## 2 コリント

4:1 このようにわたしたちは、あわれみを受けてこの務についているのだから、落胆せずに、

4:2 恥ずべき隠れたことを捨て去り、悪巧みによって歩かず、神の言を曲げず、真理を明らかにし、神のみまえに、すべての人の良心に自分を推薦するのである。

4:3 もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれているのである。

4:4 彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである。

4:5 しかし、わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。わたしたち自身は、ただイエスのために働くあなたがたの僕にすぎない。

4:6 「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。

4:7 しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。

4:8 わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。

4:9 迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。

4:10 いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。

4:11 わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。

4:12 こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである。

4:13 「わたしは信じた。それゆえに語った」としてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである。

4:14 それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて下さることを、知っているからである。

4:15 すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。

4:16 だから、わたしたちは落胆しない。たとえわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。

4:17 なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。

4:18 わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。少年イエス様の、神殿の教師たちを深く驚愕させるような賢さと理解力と知恵のゆえに御名をあげます。時に私たちが理解しがたい、深く心底驚き、慌てふためく事態が生じる時、静かに、時がかかっても、思い焦らずに神様の知恵を待ち望む深い思いをお与えください。子供からお年寄りまで、あらゆる年齢の方々が、この時こそ教会にて、イエス・キリストに出会うことができますようお願いいたします。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン